

# View from Down Under

ハイランド真理子

## インフルエンザ禍の終焉のシンボル

9月20日、「ついに」日本からトウカイトリックがメルボルンに到着したというニュースは、オーストラリアの競馬関係者たちを大いにホットさせた。21日には、オーストラリアの農林水産大臣であるジョー・ルードイグ氏が声明を出し「トウカイトリックの到着は、オーストラリアのサラブレッド産業にとって大きなブースト（後ろから押し上げること）になり、2007年に発生した馬インフルエンザ以来、日本から、最初の馬を迎えるという足跡を残した」と語った。さらに「日本馬がこれまでスプリング・レーシングカーニバルに於いて残した貢献は大きなもので、オーストラリアにまた戻ってきてくれて非常にウエルカムだ」と、温かい言葉をかけている。日本馬に対する大きな期待感から本命と対抗になりそうだったジャガーメイルとマイネルキッツが、けがなどの諸般の事情で来られなくなった。最後にはだれも来なくなってしまわないかという不安が関係者の中にあっただが、トウカイトリックがオーストラリアに来てくれたと、安堵の声があがったのである。オーストラリアの競馬関係者の間では、日本馬の遠征こそ、馬インフルエンザの終焉を告げるシンボルだったのではないだろうか。

日本の競馬関係者の間では、検疫プロトコルが間に合わず、オーストラリアには行けないかも知れないという噂も広がり、私も直接の関係者ではなかったけれども、日豪両国からの対応に追われた。私がレーシング・ビクトリアの依頼で、オーストラリアの検疫局に「日本馬が来れば、多数の日本の競馬ファンも来るだろう」という手紙を書いたのもこの頃であった。この期間、レーシング・ビクトリアのリー・ジョードン氏は、オーストラリア国内のテレビやラジオなどで、日本馬がスプリング・レーシングカーニバルに来ることがいかに重要であるかを精力的に説いて回っており、世間というブレッシャーを利用しながら、役所や政治家を動かした。Well Done! よくやった。

## ワラビー・インターナショナル・ホースセンター

トウカイトリックはオーストラリアに

着くとすぐ、オーストラリアの新しい検疫施設、ワラビー・インターナショナル・ホースセンターに入った。この施設について同馬のレーシングマネージャーである田中敬太さんに話を聞いた。「やはり、管理体制がかなり厳しいと感じましたね。厩舎から物が持ち出せませんし、僕は1日3回ぐらい厩舎に出入りするのですが、その3回とも、必ずシャワーを浴びる必要があります。もっともそれがシステムだと思えば、慣れましたけれど」と語る。外国からの遠征馬は、すべてPAQと呼ばれるPost-Arrival Quarantine（着後検疫）のために、14日間移動が許されない。調教やレースの出走は、その後ということになる。この滞留期間は、指定国により21日まで延長される。田中さんが言っていたワラビーでの「厳しい」条件とは、人でいえば、許可された人間以外は出入りが出来ないとか、PAQ中の馬に関わっている場合にはオーストラリアの地元の馬とのコンタクトは一切禁止などとなっている。馬に関しても1日2回の体温検査などを含めたデイリー・ヘルス・レコードをつけるなど、他にも細かい規則が数多くある。そして、これらに違反するとペナルティがある。競馬ブックでも何度もレポートさせてもらったけれど、オーストラリアの競馬関連産業に甚大な被害を与えた馬インフルエンザの蔓延は、その後の調査で、実はシドニーの検疫施設内に入りし人間が媒介したということが分かり、ヒューマン



2006年のデルタブルースに続きメルボルンカップ制覇をねらうトウカイトリック

今回の厳しい措置に関しては、仕方がないであろうと思われる。

ところでワラビーのホースセンターにいる外国の馬は、ほとんどがオーストラリア人所有の馬と言ってもいい。海外から来て検疫所に入っている馬たちのほとんどが、実は、オーストラリア人が外国で買って持ち込んでいるもの。2008年のメルボルンカップで2着になったパウアーは、サイモン・オドネル、テリー・ヘンダーソン氏のOTIレーシングがヨーロッパで持っている馬だし、他にも、かつてエフィシャントでメルボルンカップを制したロイド・ウィリアムス氏が、ヨーロッパで買った4頭の馬もワラビーのホースセンターに入っている。フランスからやってきたアメリカンも、オーストラリアのジェリー・ライアン氏の所有だ。ではなぜ、こんなことが起きるのであるか。それには、いくつかの理由がある。一つ目は、オーストラリアには2マイルを走れる馬がほとんどいない。血統的に無理なのだ。次に、オーストラリアの経済力。オーストラリア人には、今かなりの経済的な余裕がある。そして最後に、もし牝馬でヨーロッパ血統であれば、オーストラリアでも繁殖としての付加価値があるということなのかも知れない。

## トウカイトリックに高い関心

オーストラリアのニュースの見出しに、"Here Comes The Japanese" つまり「ホラ、あの（強い）日本馬がやってくるぞ」とあり、孤塁を守るトウカイトリックにも、かなり関心が高い。前述の田中敬太レーシングマネージャーに話を聞いた。彼はまず、初めに「オーストラリア政府、並びに精力的に動いてくれたレーシング・ビクトリアのジョードン氏に、本当に感謝したい」と言った。そして、現在のトウカイトリックの調子について「来た当初は初めての場所で少し不安げな様子をしていましたが、ヨーロッパの馬たちが入ってきてからは、いつもの調子に戻り落ち着いています。飼い葉





インタビューを受ける田中敬太氏

インターナショナル・トラックワーク (ワラビーのインターナショナルホースセンター)



ザルカヴァで凱旋門賞を制した、デュブレ調教師は、アメリカンでメルボルンカップに挑戦

「食いも完全で、全く問題がありません」と、なんだか嬉しい報告だ。まあ、いろいろ困難はありながら、なぜメルボルンカップに来ることになったのかと質問したら、「長い距離を得意とするこのトゥカイトリックを、野中(賢二)調教師はずっと前からメルボルンカップに挑戦させたかったようです。長距離を走らせたなら、日本のトップの馬ですからねえ」と語った。期待のトゥカイトリックは、前哨戦のコーフィールドカップからメルボルンカップをねらう。

### 欧州からの挑戦

日本以外の外国からも多くの馬がやってくる。まず、モデル並みに美しい娘さんがアシスタントを務めている、メルボルンカップには欠かせない英国からのルカ・クマーニ調教師。管理馬としては、パーブルムーンと前述のパウアーが2007年と2008年にそれぞれ入着している。今年連れてきている馬は、O T Iレーシング所有のマニガー、ベキュアドレとドラクンセイラー。マニガーは現在5歳、12戦して6勝。昨年の10月フランスのG IIショードネイ賞を勝っているが、今年はまだ勝ちがない。しかし、現在11番目の登録順位で、コーフィールドカップの出走は確定している。あとの2頭は、次戦の結果次第だ。ドラクンセイラーは6歳。グッドウッド競馬場で準重賞のマーチステークス(2800m)を勝った。また、5歳のベキュアドレは12戦して4勝。まだ重賞は勝っていない。少し足りないかも知れない。

フランスのアガ・カーンIV殿下の有名なプリンシパルトレーナーであるアラン・ロワイエ・デュブレ調教師は、今回初めてメルボルンカップに参戦する。彼は、2003年ダラカニで、また2008年にはザルカヴァで凱旋門賞を獲得している。デュブレ調教師の管理馬は、6歳のアメリカン。18戦して6勝、8月22日のフランスのG IIケルゴレイ賞(3000m)でマニガーを破っている。フランスから

は、ラリスタンも来た。これはオーストラリアの元カジノ王、前述のロイド・ウィリアムス氏が買って、デビッド・ヘイズ厩舎に入れている。ラリスタンは、コーフィールドカップとメルボルンカップの両方にノミネートされている。また、アイルランドのアクザーもウィリアムス氏の所有馬。さらに、今年のエプソムダービーの2着馬アットファーストサイトと、やはり4歳のセプテンバーモーンとアンバーグレイは、来年のメルボルンカップのために同氏に購入され、輸入された。

10月11日にメルボルン到着予定の馬は、ゴドルフィンチームの馬。G I優勝馬のカンパノロジスト、ホルバーク、そしてイースタンアリアが、現在英国のニューマーケットにある検疫所で待機している。イースタンアリアは、最近ゴドルフィンに入った馬だが、マーク・ジョンストン調教師が引き続き管理をすとされている。ジョンストン調教師は、前にもメルボルンカップに挑戦しているが最高着順は12着に終わっている。なお、このイースタンアリアは、ドンカスターでのG IIパークヒルステークスに勝ち、評価が上がってきたが、メルボルンカップには50.5キロとハンデが軽い。ちょっと臭うというのが私の印象。これまでゴドルフィンチームも、今まで、あとわずかというところで、メルボルンカップを逃しているのも、そろそろ順番が回ってくるかもという「予感」がしている。

メルボルンカップの出走をねらっている馬は、10月20日に開催されるジョロンカップをターゲットにしている。というのも、2002年にアイルランドから遠征したメディアパズルが、メルボルンカップとのダブル優勝を果たしたからだ。そし

て、このレースをねらうのは外国勢だけでなく地元オーストラリア勢も同じこと。実際、シーズアーチャーやオンアジュンも、このレースをステップに、メルボルンカップで2着になっている。

### 迎え撃つオーストラリア勢

さて、これらインターナショナル馬を迎える今年のオーストラリアの地元勢はどうだろう。10月3日に、距離は2000mと少し短いものの、メルボルンカップを目指す馬たちが出走したG Iのターブルステークスが開催された。結果は、2000mのスペシャリストで、このあとコックスプレートを最大目標にするジッピングが勝った。ジッピングは、先ほどから何度も話が出てくるロイド・ウィリアムス氏の所有馬。現在9歳、デインヒルの直仔である。コックスプレートでは、昨年、一昨年と入着していて、今年は3度目の正直となるだろうか。同馬はまた、メルボルンカップにも登録している。距離は彼の場合、適正とは言えないけれど、それでもメルボルンカップでは、2007年と2008年に、それぞれ4着と9着と健闘している。今回のターブルステークスでは、昨年のメルボルンカップの覇者ショッキングが2着に入った。期待のスーパー牝馬タイフントレーシーは5着。また、パート・カミングス調教師の管理馬で、メルボルンカップの本命馬に押されているフェイントパーフェムは6着、有力馬ダリアーナも11着だった。しかし、パート・カミングス調教師の馬からはやっぱり日が離せない。ダリアーナはともかく、6着になってもフェイントパーフェムは……。

### 筆者●プロフィール



Mariko Hyland ■ 団塊の世代。アナウンサー、コピーライターなどを経る。著書に「オーストラリアとニュージーランドの競馬ガイドブック」など。オーストラリア人の夫、2人の娘とシドニー在住。